

14 NASH 患者への食事指導介入効果の検討

深澤 尚子・石川 達\*・窪田 智之\*  
吉田 俊明\*

済生会新潟第二病院栄養課  
同 消化器内科\*

15 臍頭十二指腸切除 (PD) 後 10 年の経過で肝不全状態となり、栄養療法で社会復帰が可能となった 1 例

戸枝 路子・小師 優子\*・堂森 浩二  
山田 一樹・河内 裕介・五十嵐正人  
須田 剛士・村山 稔子\*・青柳 豊  
新潟大学大学院医歯学総合研究科  
消化器内科学分野  
同 栄養管理部\*

症例は 50 歳代、女性。

【主訴】腹部膨満、下腿浮腫。

【現病歴】平成 13 年、近医で臍頭部背側後腹膜腫瘍に対し PD (Child 変法再建) が施行された。病理結果は mature cystic teratoma であった。その後、経過中に著明な脂肪肝を呈し、平成 22 年 6 月頃より腹水、下腿浮腫が出現、徐々に増悪するため、平成 23 年 1 月に同院へ入院した。全身管理を行うも改善が認められず、同年 2 月に当院へ紹介、入院となった。入院時生化学検査は、肝不全状態を示し、CT 上肝は萎縮、中等度の腹水貯留が認められた。音響放射圧を用いて測定された肝内せん断弾性波速度は肝硬変に匹敵する値を示した。入院後、推定一日必要総エネルギー所要量を中心静脈栄養で開始し、経腸成分栄養の併用を経て、大量の臍酵素製剤補充下に食事へと移行した。各ステップで体重、血清アルブミン値、PT に加え、非蛋白呼吸症、ApoB を栄養指標とすることで、病態悪化のリスクを回避することが可能であった。約 3 ヶ月後には肝萎縮、脂肪肝は著明に改善し、腹水は消失、肝硬度は F3 程度へ改善した。

【考察】臍切除後の脂肪肝は、臍外分泌機能低下による脂質を主とした吸収不良を背景として生じる。吸収される 3 大栄養素の偏りが肝への脂

肪沈着を助長すると推察され、Apo B の合成低下に伴う、肝からの VLDL 分泌障害はその一因と考えられる。

16 肝臓病教室参加者数の地域別推移

—現状と問題点—

丸山 由華・石川 達\*・深澤 尚子\*\*  
鈴木 光幸\*\*\*・阿部 弘子\*\*\*\*  
小山富士子\*\*\*\*・中野ともみ\*\*\*\*  
植木 文\*\*\*\*・中山 陽子\*\*\*\*  
野口 博人\*\*\*\*・長谷川江梨名\*\*\*\*

済生会新潟第二病院事務部  
同 消化器内科\*  
同 栄養課\*\*  
同 薬剤部\*\*\*  
同 看護部\*\*\*\*

17 肝臓病治療における臨床心理士の役割  
～県立中央病院の場合～

早津 正博・吉川 成一\*・有賀 諭生\*  
山川 雅史\*・津端 俊介\*・平野 正明\*  
県立中央病院臨床心理士  
同 内科\*

当院では 2007 年より臨床心理士が常勤、全科対応で勤務しており、肝臓病医療チームとも必要に応じて連携し、患者・家族の心理面のケアにあたってきた。また、2010 年度から立ち上がった肝臓病教室にもメンバーとして加わり、教室において講師を担うなどしてきた。これらの中で担ってきた臨床心理士としての役割は、①診療スタッフへのこころの援助に関する視点の提供、②依頼を受けたケースへの心理的援助、③教室などにおいて、精神保健や予防のための教育や啓蒙活動を行うこと、の 3 つにまとめられる。

診療にあたる医師や看護師も、身体面はもちろんのこと心理面にも関心を向けており、それは患者・家族との信頼関係の構築、ひいては治療効果にまで影響を及ぼすと考えられ、重要なことである。しかし実際には、多忙を極めるなどの現実的

制約や専門性の違いもあるため、心理面のケアや援助という点で困難を生ずる場合がある。そこを①～③のようなアプローチを中心にして補うことで診療や治療が効果的に進むよう働きかけることが、臨床心理士の役割であったと考える。

## 18 当院における肝臓病教室への取り組みと直面している問題点

宮崎 知子・亀井 広美・富樫 啓子  
 浦沢 成江・有賀 諭生\*・吉川 成一\*  
 山川 雅史\*・津端 俊介\*・平野 正明\*  
 県立中央病院内科外来  
 同 内科\*

【目的・背景】当院における肝臓病教室の、これまでの取り組み・成果と直面している問題点について報告する。

【教室構成と理念】8職種29名で運営している。共通目標は「肝疾患患者のQOL向上」、運営理念は「参加者同士または参加者と医療者を繋ぐ貴重な場」「日常業務と教室とをフィードバックする機会」である。これらに向けて職種ごとに独自の目標を掲げ活動している。

【取り組み・成果】懇親会や休憩時間を、参加者同士または参加者と医療者との交流の場として重要視している。ここでの交流を通して患者のニーズを拾い上げ、日常の診療や患者指導、各職種の連携に反映させている。

【問題点】若年層の参加者が少ない。スタッフの中にあるマンネリ化。病院側の協力が得にくく院内での活動や学術活動に限界がある。

【結語】肝臓病教室は、日常診療において患者と医療者を繋ぐための重要なツールとして確立している。今後、院内のみでなく地域との連携も視野に活動を展開したい。

## 19 若年者B型慢性肝炎に対するIFN治療の当院における現状

長島 藍子・石川 達・堀米 亮子  
 阿部 寛幸・廣瀬 奏恵・窪田 智之  
 富樫 忠之・関 慶一・本間 照  
 吉田 俊明

済生会新潟第二病院消化器内科

【目的】当科における若年者B型慢性肝炎に対するIFN治療の成績からB型慢性肝炎におけるIFNの意義について検討する。

【方法】対象はB型慢性肝炎と診断され、IFN治療を行った7症例で、年齢は20～34歳、男女比は4対3、genotype Cが5例、genotype A, Dがそれぞれ1例であった。治療前のHBV-DNA量は5例が7 log copies/mL以上(高値群)、2例が7 log copies/mL未満(低値群)であった。IFN治療前後でのHBV-DNA量、ALT値について検証した。

【成績】高値群はIFN投与中、投与後共にHBV-DNA量の低下はほとんど認めなかった。低値群では投与終了12ヶ月後まで、HBV-DNA量は低値を維持できたが陰性化は得られなかった。genotype Aの症例においてもVRは得られなかった。ALT値は治療後6ヶ月の時点でBRとなったものは1例であった。

【結論】35歳未満のB型慢性肝炎への治療はIFN治療が推奨されているが、既存のIFN療法での治療効果は十分とはいえなかった。現在PEG-IFN製剤が保険適応となり、成績向上に貢献し得るかの検討は必要である。核酸アナログ製剤(NA)の中止基準が確立されつつある現在は、若年者でもNAとの併用によって治療効果を発揮させ、Drug freeに持ち込むことができるかを含め、IFNの意義を再検討していきたい。